

歴史的仮名づかひを習得する為の『手引書』

戦後教育を受けて育った私にとって、「歴史的仮名づかひ」で正確に書くのは未だに難しいことです。

『澤部通信』は、皆様のご支援により、七十三号を数へ、編集の積み重ねのせるか、「澤部通信」の「歴史的仮名づかひ」の間違ひで、長内俊平さんのお手をおつたはずとは、当初に比べ、少なくなつたものの、やはり訂正が出る始末です。

日本の文化・伝統・歴史の破壊をならつて、戦後占領行政により強行された、国語政策のもたらした弊害は、まことに大きく、そのおろひどほり、私達の祖先が守り、育んできた、美しく、豊かな日本語が破壊され、今や失はれつつあります。日本の古典は、勿論「歴史的仮名づかひ」により表記されてゐるので、日本の文化・伝統・歴史を正確に学ぶためには「歴史的仮名づかひ」をあらためて習得しなければならないと言ふ、不道理かつ情けない状況にあります。「澤部通信」を編集してゐて、感じるのですが、戦後教育を受けた世代の人に「歴史的かなづかひ」の間違ひが多く見受けられますが、当然のことと言入ります。

さうは言つても、日本人である以上、占領政策による戦後教育のもたらした悲劇として見過ごしては出来ない気持ちがあります。日本語を正確に表現出来ないといふことは、日本人としての学力の低下であつて、これでは日本の文化・伝統の継承は出来ないのではないですか。日本人の一人としてこの憂ふべき状況を何とか打破しようと言ふ思ひで、この「手引書」を作成致しました。

福田恆存先生の「私の国語教室」、林武先生の「国語の建設」、神社本庁研修所発行の「歴史的仮名遣ひ」等を参考文献としました。

この「手引書」を作成し終へて、「現代仮名づかひ」がいかにヤカラメで、いい加減なものであるかを、あらためて痛感させられました。それと同時に感じさせられたことは、意外にも、「歴史的仮名づかひ」は極めて論理的であり、特に活用動詞については一貫してあります。先づ原則を覚え例外を承知してをれば、決して難しくなつて言ふことでは、一刻も早く「歴史的仮名づかひ」に戻つて貰ひたいと切望するものです。

「歴史的仮名づかひ」を習得するためには、自分である程度、努力しなければならぬのは当たり前ですが、皆さんが「歴史的仮名づかひ」に親しみを覚え、「歴史的仮名づかひ」を習得なさる「助」だ、「手引書」がなればと思ひます。「手引書」にない言葉は御自分で辞書をお引き下さい。なほ、この「手引書」に例示されてゐる言葉が全部を網羅してゐるわけではありませんし、追加すべき点、改善すべき点が多々あると思はれます。お気づきの点を、皆様よりお寄せ頂き、改訂版を後日発行したく、協力の程宜しくお願ひ申し上げます。(平成六年九月吉日 澤部 壽孫)

一 活用語尾の仮名づかひ

(一)	「あ行」の活用語	頁数(一)
(二)	「か行」の活用語	頁数(二)
(三)	「た行」の活用語	頁数(三)
(四)	「な行」の活用語	頁数(三)
(五)	「を行」の活用語	頁数(三)~(四)
(六)	「わ行」の活用語	頁数(四)
(七)	「文語活用」のまへ	頁数(四)

二 歴史的仮名づかひの原則と例外

(一)	「ら」と「り」と「る」の区別	頁数(五)
(二)	「う」と「む」の区別	頁数(六)
(三)	「え」と「へ」と「ゑ」の区別	頁数(七)
(四)	「お」と「ほ」と「を」の区別	頁数(七)
(五)	「わ」と「は」の区別	頁数(八)
(六)	「じ」と「ぢ」の区別	頁数(八)
(七)	「ず」と「づ」の区別	頁数(九)

次

目

一・活用語尾の仮名づかひ

文語の活用語(動)の語尾の仮名づかひについては、その『文語動詞の語形』をしっかりと把握することが必要です。

(一) 「ぬへ行」の活用語

「ア行ト」假借活用語」としては「得(う)」「と」「心傳(こころづかひ)」の語があり、次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	口形	命令形
「得」	え	え	う	うる	うわ	えよ

註) 文語の終止形は「得(う)」「と」「心傳(こころづかひ)」であり、語幹語尾の区別はありません。例えば「入(い)は終止形だ」といふ助動詞なので「得(う)」「心傳(こころづかひ)」「と」であり、「入(い)」「心傳(こころづかひ)」「と」は間違ひです。

(二) 「ぬへ行」の活用語

「サ行ト」假借活用語「語」の語尾の仮名づかひについては、「交(ま)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の三語があり、「交(ま)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の語があり、次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	口形	命令形
「語」	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
「語」	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ

註) 口語で「語」終止形「ぬ」「ぬ」「ぬ」「ぬ」のやうな「へんじル」となるものは「サ行活用語」となります。

(三) 「ぬへ行」の活用語

「ア行ト」假借活用語「は」「希(き)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の七語のみです。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	口形	命令形
「は」	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ

註) 文語では語尾の終止形が「ぬ」となるものは「へんじル」となるものと区別する必要があります。また「は」の活用は「ぬ」となるものと区別する必要があります。

(参考)

- ① 「ぬへ行」は、假借活用語「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の語があり、次のやうに活用します。
- ② 「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の語があり、次のやうに活用します。
- ③ 「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の語があり、次のやうに活用します。
- ④ 「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」「ぬ(ぬ)」の語があり、次のやうに活用します。

(四)「はる行」の活用

①「八行四段活用語」は、多くありますが、打消の助動詞「ず」をつけて「・・・ワす」のやうな「ワ」の音が出る動詞は「八行四段活用語」です。次のやうに活用します。(後述の(五)「や行」、(六)「わ行」以外はすべて「は行」です)

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「言ふ」	言は	言ひ	言ふ	言ふ	言入	言入

主要な「八行四段活用」の動詞

購ふ	論ふ	味はふ	扱ふ	会・合・違ふ	遭・遇ふ
争ふ	洗ふ	憩ふ	祝ふ	厭ふ	言ふ
伺う	失ふ	疑ふ	奪ふ	占ふ	潤ふ
歌ふ	敬ふ	思ふ	憂・愁ふ	行ふ	観ふ
覆・被ふ	負・追ふ	囲ふ	適・叶ふ	飼・買ふ	庇ふ
通ふ	競ふ	構ふ	氣通ふ	食ふ	狂ふ
嫌ふ	乞ふ	興ふ	逆ふ	従ふ	寐ふ
しまふ	救ふ	損ふ	添・削ふ	漂ふ	害ふ
戦ふ	漂ふ	賜ふ	給ふ	響ふ	違ふ
使ふ	償ふ	繕ふ	集ふ	誓ふ	問ふ
調ふ	弔ふ	伴ふ	習ふ	整ふ	担ふ
臭ふ	似合ふ	匂ふ	願ふ	宣ふ	払ふ
引合ふ	拾ふ	追ふ	齎ふ	贈ふ	舞ふ
向ふ	迷ふ	惑ふ	養ふ	履ふ	貰ふ
備ふ	酔ふ	装ふ	笑ふ		

②「八行上二段活用語」は「強ひ」と「用か」の二語のみです。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「強ひ」	強ひ	強ひ	強ひ	強ふる	強ふれ	強ひよ

(註)「用か」「は」用ゐる「として」「つ行」にも活用します。

③「八行下二段活用語」は終止形が「考ふ、答ふ、支ふ、加ふ、堪ふ」のやうに発音が「ウ」音になります。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「考ふ」	考へ	考へ	考ふ	考ふる	考ふれ	考ひよ

(五)「や行」「わ行」の活用

①「ヤ行上二段活用語」は「射」の「射」は語幹語尾の区別がなく、文語の已然形は「射す」「射す」は普通語です。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
「射」	射	射	射	射る	射れ	射ひよ

(註)「射」の「射」は語幹語尾の区別がなく、文語の已然形は「射す」「射す」は普通語です。

⑤ 「ヤ行下二段活用語」は、文語では、終止形が、「越ゆ、消ゆ、栄ゆ、見ゆ、絶ゆ、」と「いふやうだ」ゆ」となります。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	口疑形	命令形
「消ゆ」	消え	消え	消ゆ	消ゆる	消ゆれ	消えよ

主格な「ヤ行下二段活用語」

見ゆ	燃ゆ	萌ゆ	閉ゆ	煮ゆ	映ゆ	冷ゆ	増ゆ	吠ゆ
越ゆ	生ゆ	映ゆ	冷ゆ	絶ゆ	増ゆ	吠ゆ	消ゆ	消ゆ
越ゆ	吸ゆ	舞ゆ	絶ゆ	滑ゆ	萎ゆ	消ゆ	消ゆ	消ゆ
越ゆ	越ゆ	肥ゆ	超ゆ	凍ゆ	汲ゆ	消ゆ	消ゆ	消ゆ
越ゆ	越ゆ	怯ゆ	奮ゆ	覚ゆ	消ゆ	消ゆ	消ゆ	消ゆ

⑥ 「ヤ行下二段活用語」は、文語では、終止形が、「越ゆ、消ゆ、栄ゆ、見ゆ、絶ゆ、」と「いふやうだ」ゆ」となります。また、終止形の発音が「ウ」となります。で「ヤ行下二段活用語」であり、「絶える」の文語終止形は「絶ゆ」で、終止形の発音が「ユ」ゆると、「ヤ行上二段活用語」なるといって注意してください。

⑥ 「ワ行」の活用

① 「ワ行上二段活用語」は「居る」「率るる」「用ふる」の三語は、それぞれ次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	口疑形	命令形
「居る」	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ

② 「前述の如く」ります(在る・坐す)「は」らうてやります」とらる意の相手に対する敬語であり、「ら」を尊みます。ここでは「ゐます」「居る」の「ゐ」+助動詞の「ます」(と敬語になります)とします。

③ 「ワ行下二段活用語」は「飢う」「植う」「握う」の三語のみです。次のやうに活用します。

活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	口疑形	命令形
「植う」	植え	植え	植う	植うる	植うれ	植えよ

④ 「植はる」「握はる」「植はる」は「植はる」「握はる」から来ているので「ワ行」であり、「植はる」「握はる」とは書きません。

⑦ 「文語体」の活用

ワ行	X	用ふる「居る」の三語のみ	X	報ゆ「老ゆ」「強ゆ」の三語のみ	X	植う「飢う」の三語のみ	X
ヤ行	X	射る「の」一語のみ	X	越ゆ「老ゆ」「強ゆ」の三語のみ	X	越ゆ「消ゆ」の三語のみ	X
ハ行	X	X	X	X	X	X	X
タ行	X	X	X	X	X	X	X
ザ行	X	X	X	X	X	X	X
ア行	X	X	X	X	X	X	X

二・歴史的仮名づかひの原則と例外

歴史的仮名づかひについては、先づ原則を覚え、次に例外を覚えることが肝要です。但し、ここに掲げた例外は主に使はれる言葉ゆゑに一応の目やすとしての例外であり、全てではありませんので、わからない言葉は辞書を引いて下さい。

(一) 「い」と「ゐ」と「ひ」の区別

○ 原則

- ① 左記の例外「ゐ」を除き、韻頭の「イ、ヒ」は、発音通り、主として「い、ひ」と書きます。
 ② 左記の例外「ゐ、い、ひ」を除き、語中と語尾の「イ、ヒ」は、発音通り、すべて「ひ」と書きます。

例外(二)・語頭「ゐ」「ひ」を使ふ主要な言葉

ゐ(居)	ゐ(井)	ゐ(猪)	ゐ(圃)	ゐ(支)
ゐ(び)猪類	ゐ(ざり)産	ゐ(び)井戸	ゐ(な)田舎	ゐ(こ)家
ゐ(もり)樂	ゐ(ただ)か(居)高	ゐ(た)け(高)	ゐ(る)居	ゐ(張)る

例外(三)・語中と語尾「ゐ」「ひ」を使ふ主要な言葉

ゐ(る)藍・あ(を)・青	い(ち)る(水)松	か(も)る(鴨)居	あ(ぢ)さ(る)紫陽花	く(ら)る(位)
く(れ)なる(紅)	く(わ)る(縁)姑	し(き)る(敷)居	し(は)る(ま)居	せ(る)所為
ま(で)る(圓)居	し(ほ)る(産)居	も(と)る(産)居	つ(の)対	な(る)地産

【行上】段活居語(産)ゐる・用ゐる(の)活居語

例外(三)・語中と語尾「い」「ひ」を使ふ主要な言葉

一 群「き」が音便変化したもの	高(き)	お(び)に(於)	お(ほ)いた(大)	か(り)權
美(し)	高(い)	お(び)に(於)	お(ほ)いた(大)	か(り)權
か(い)ぞ(入)介添	か(い)な(で)	か(い)ま(る)居(担)間	か(う)が(い)居	か(い)ま(ま)居(接)縁
さ(い)な(む)叱責	さ(い)は(ら)居(産)居	さ(い)は(び)居(幸)	ぜ(ん)ま(う)居(産)	た(い)ま(う)居(松)明
つ(ら)た(ち)一(日)朔	た(わ)いな(ら)	つ(ら)た(て)居(衝)立	つ(ら)で(序)	つ(ら)つ(り)居
つ(ら)つ(り)	や(ら)い	や(ら)は(刃)	つ(ら)は(び)居(塚)	

一 群「あ」が音便変化したもの

【註】「あ」が音便変化したもの

二 群(延)音	「え」(舌)	「す」(舌)	「た」(舌)	「さ」(舌)	「は」(舌)	「ひ」(舌)	「む」(六)日	「の」(延)音
「ら」(舌)	「さ」(舌)	「た」(舌)	「せ」(舌)	「は」(舌)	「ひ」(舌)	「む」(六)日	「の」(延)音	
「ひ」(舌)	「む」(六)日							

四 群(その他)

あ(る)は	あ(る)業	い(れ)は	へ(た)さ	ら(い)ひ
-------	-------	-------	-------	-------

(1) 「う」と「む」の区別

○原則

- ① 韻頭の「ウ、ム」は、発音通り、「つなだ」ウ、ム「と書き表す。
 ② 左記の例外(「ウ」を「ム」を除き、語中と語尾の「ウ」は、主として、「ム」と書き表す。

例外・・・語中と語尾の「ウ」を「ム」と書く主な言葉

一 群

・・・「へ」のウ音便(「へ」の音は「ウ」に変わったもの)

ありがたう(ありがたく)

おめでたう(おめでたく)

かたじけなう(かたじけなく)

美しく(美しへ)

おはよう(おはやへ)

かうして(格十・・・かへし)

かうして(かへして)

かうはじ(香・・・かへして)

少なう(少なへ)

どうた(とへた)

ようこそ

二 群

・・・「ひ、び」のウ音便(「ひ、び」の音は「ウ」に変わったもの)

いもうと(妹・・・らむひて)

おとと(弟・・・おとひて)

かうじ(麴・・・かび立ち)

かりと(狩人・・・かりひと)

向う(向かひ)岸

くろくと(玄人・・・くろひと)

なかうと(仲人・・・なかひと)

あまうと(商人・・・あまひと)

しんと(舅)

のうのう(のひひ)

めしと(召人・・・めしひと)

しんうと(業人・・・しんひと)

まらうと(客人)

(註) 「ハ」行四段音便の動詞「向む」は猛烈「む」を使ふが、「向う岸」「向う側」「向う五か年」の「ウ」は「向かひ」の「ひ」の音便形ゆゑだ。「ウ」が正しい。「む」か「ウ」と發音する場合は「む」であり「む」か「ウ」と發音する場合は「ウ」だと覚えても良い。

三 群

・・・「み、ま、む」のウ音便(「み、ま、む」の音は「ウ」に変わったもの)

かうがい(拜)

かうぞ(楮)

かうがうしい(神々)

かうへ(首・上の邊 神戸・神郡)

たうげ(峠・手向け)

てうづ(手水)

こうぢ(小路)

・・・(「ま」が訛つたもの)

四 群

・・・「は」のウ音便(元來「は」文字であつたのが、「フ」音に代り、さうだされたが「ウ」に代つたもの)

かうむり(編)

かうむり(編)

てうな(手傘)

はうき(袴)

五 群

・・・延音

なうて(ちて)

とうき(父)

とうづ

とうぎ

めうが(若荷)

やうか(八日)

やうちう(漸)

ゆうへ(昨夜)

ゆさう(新賣)

ぶうてい

ぶうご

かうむる(變)

はうむる(變)

まうむる(設・儲)

六 群

・・・意志・推量の助動詞「ウ」(あう、書かう、言はう、食はう、飲まう、行かう・・・)この助動詞は動詞の未然形につきませう。

(註) ① 意志・推量の助動詞「ウ」は動詞の未然形に上へる「む」の「ウ」か「ム」かは、いづれでも留聲する。

② 「あうへ」は昨夜の意で、「夜へ」の「え」が「あ」に転じて伸びたものです。「あ」の「ウ」か「ム」かは、その方の意味です。

③ 「か」か「む」は(氏)(田)(日)の「ウ」か「ム」の「ウ」か「ム」(來)(田)(日)の「ウ」か「ム」の「ウ」か「ム」か「ム」を推します。

④ 「向」(向)、「へ」(へ)、「編」(編)、「放」(放)、「渡」(渡)は「カ」と發音して、「カ」と書き表します。

(二) 「え」と「あ」と「へ」の区別

○原則

- ① 左記の例外(「あ」を除き、語頭の「エ、ハ」は発音通り、主で、「え、へ」と書きます。
 ② 左記の例外(「あ」と「え」を除き、語中と語尾の「エ」は、ほとんど「へ」と書きます。

例外 ① 語頭に「あ」を使う主なる言葉……あ(絵)

あ(鮭)

あがほ(笑顔)

あかく(描)

あがらつばい

あくぼ(罇)

あこう(会回)

あじき(会式)

あじやく(会釈)

あぢい(越後)

あぐる(扶)

あふ(酔)

あむ(笑)

ある(彫)

例外 ② 語中語尾に「あ」を使う主なる言葉……いじすあ(礎)

こあ(言)

こずあ(梢)

すあ(末)

ちあ(知恵)

つくあ(机)

ともあ(田)

ゆあ(故)

つあ(杖)

ほほあみ(微笑)

ほろあひ(仄酔)

コ行下一段活語……植う・飢う・据うの三語の活用語尾

例外 ③ 語中語尾に「え」を使う主なる言葉

ささえ(栄耀)

ぬえ(娘)

きのえ(甲)

ひえ(種)

ふえ(笛)

いえ(否)

ひのえ(丙)

ねえさん(姉)

はえ

「ヤ行下一段活」の動詞の活用語尾(四買)に述べたやうに未然形・連用形「消え」、命令形「消えよ」に「え」を使う

(四) 「お」と「ほ」と「を」の区別

○原則

- ① 左記の例外(「を」を除き、語頭の「オ」は発音通り、主でして、「お」と書きます。
 ② 左記の例外(「を」を除き、語中と語尾の「オ」は、主でして、「ほ」と書きます。

例外 ① ……語頭に「を」を使う主なる言葉

を(小)

をがわ(小川)

をぐらい(小暗い)

をやみ(小止み)

を(尾)

を(緒)

ををしい(雄々)

をか(丘・岡・陸・傍)

をかしい

をき(萩)

をけ(桶)

をこがましい(愚拙)

をこそつまん

をけら(植物)

をさ(長)

をさ(ま)

をしへ(教)

をす(雄)

をてり(樽)

をてて(一昨年)

をとり(蝶鳥)

をさない(幼・稚)

をちび(越度)

をどり(踊)

をててひ(一昨日)

をこ(男)

をとめ(少女)

をち(叔父・伯父)

をは(叔母・伯母)

をんな(女)

をこ(夫)

をはり(終丁)

をばな(尾花)

をひ(甥)

をの(芥)

をり(檻)

をりをり(折々)

をうち(大蛇)

をる(屈)

をる(折)

をしむ(惜)

をかす(侵・犯・冒)

をがむ(拝)

をし(教)

をさむ(治・納・収)

をのく(戯)

をめく(叫喚)

例外 ② ……語中語尾に「を」を使う主なる言葉

あを(毒)

いさを(煎・功)

うを(魚)

かをり(蕪・香)

かはうそ(川獺)

たを(か)婦

たを(め)手弱女

とを(十)

さを(竿・棹)

し(き)葎

は(せ)芭蕉

かつを(煙)

ひを(氷魚)

ひを(て)耕織

みさを(糠)

み(き)つ(落)

め(を)と(夫)婦

し(を)れる(羨)

ま(を)す(甲)

(註) ① 接頭語の「を」には元来「弱小」、若「い」、愛らしいの意があり、「をみな」は若い女を、「おみな」は老女を意味します。

② 「お」は語頭だけで語中語尾にはこないが、唯一の例外は「はおり(羽織)」です。

◎原則 語彙「サ」系と語彙「シ」「ス」系とを結合されるものは「サ」と「シ」「ス」とを並べ、左語の「サ」以外はすべて「シ」と考へて良。

例外(主なる言葉)

あふす(杏)	いこふ(礎)	うす(漏・霰)	かるはずみ	かす(敷)
かなす(込)	きす(群・歸)	くす(肩・厚)	こす(削)	すすき(髄)
すす(鈴・錫)	すすて(任・籍)	すすこ(涼)	すすしろ(縹)	すすめ(雀)
すすて(金・給・繭)	すすな(奈)	すすり(詔)	すすら(濁)	すなすり(臆)
たたずまひ	わたみ(圃)	はず(器)	はすみ(機・勢)	ひすみ(金)
みみす(紙・睡)	もも(百・田)	やはす(矢・管)	「サ」行語詠	さす(察、感ず、禁ず、信ず)
たたずむ(仔)	はむ(輝)	ます(混・交)	はず(礎)	

「サ」行語詠「シ」の語詠「シ」……「詔」、交す、燻す、察す、感ず、信ず、諭す、等、「詔」(參見)

「サ」「シ」「ス」の語詠「サ」は「シ」「ス」の語詠「シ」「ス」の語詠「サ」は「シ」「ス」の語詠「サ」……「詔」(參見)

◎「シ」「ス」を用ひるは「サ」の類

あふ(小)	あ(梓)	あ(東)	いか(池)	いた(瀝)
あふ(泉)	あふ(淵田)	あふ(河)	いな(雉)	いな(語)
あふ(瀧)	あふ(静か)	あふ(方・後)	な(葦)	な(駝)
あふ(先)	あふ(註)	あふ(註)	み(水)	み(水)
あふ(瀧)	あふ(瀧)	あふ(瀧)	わ(池)	わ(池)
あふ(瀧)	あふ(瀧)	あふ(瀧)	わ(池)	わ(池)
あふ(瀧)	あふ(瀧)	あふ(瀧)	わ(池)	わ(池)

(參見)

◎形容詞・形容動詞・助動詞の活用は「サ」系と語彙「シ」「ス」系とを結合されるものは「サ」と「シ」「ス」とを並べ、左語の「サ」以外はすべて「シ」と考へて良。